

「笹川杯作文コンクール 2009」～日本語で応募～ 優秀賞作品

※日本語の原文を尊重し、一切手を加えておりません。

「私の先生」

南京信息工程大学 王嬋



二年前まで三年間、私は南通紡績技術専門学校で服装デザインを専攻した。しかし、自分の専攻を全然好きではなく、時々自分の将来について悩んだ末に。私は日本語を専攻するために、江蘇省の大学転入試験に参加することを決心した。

その時三浦という先生に出会った。

三浦先生が「自分に気持が決まったら、後は頑張るだけ」と私を励まし、手を差し伸べてくださった。当時、三浦先生は平日の授業が忙しく、毎週の週末にも上海へ行って通訳コースを受けていた。忙しいにもかかわらず、毎週の金曜日に私の日本語学習を指導してくださった。先生に甘え、私は全力で試験を準備した。

先生の御陰で、この転入試験に合格したのである。

結果発表の時は初夏の夕方。嬉しくてたまらない私は小鳥のように三浦先生のアパートに飛んでいった。

「先生、私、合格したよ」

夕暮れの中で立っていた先生は私より嬉しい様子で

「本当に、王さん、すごい」とおっしゃった。

その日の夕暮れの先生の姿は一生忘れられない。

大学に転入した後、菊埼という親切な先生と出会った。家の祖父みたいな優しい方である。いつも微笑みながら、私の言うこと、好きな男とか、最近流行のことなどをとりとめなく話すと結構喜んで聴いてくださった。先学期のある日、先生と話した時、「岩崎ちひろさんの絵が好きです」

と言ったことがあったが、それから何か月後、もうこのことを忘れていた時、先生は岩崎ちひろの小さな絵の飾りをプレゼントにくださった。

「この間王さんは彼女の絵が好きだって言ってたよね」

すごく感動した。感動したのは先生からいただいたお土産ではなく、先生の心なのだ。数多くの学生の趣味をいちいち覚えることは、先生の生徒たちとこの仕事に対する真心の現れである。

先生たちの生活と仕事に対する真面目な態度にとっても感服している。

ある本と読むと、山本七平という評論家は

「日本人の勤労というのは、すなわち仏教で言う成仏のための修行であり、つまり、私欲のない労働の結果とされる」

これは日本人が「働きバチ」と称される原因であろうが、私が見たのはもっと意義深いことである。先生たちにとって、教師という仕事はただ仕事だけではなく、人生の楽しさの一つである。「羅生門」を教える時の菊埼先生は教師ではなく、

「文学作品の美しさを一緒に楽しみましょう、中の奇妙なことをいっしょに捜そう」

と、学生同士みたいである。確かにそうである。先生も私たちの友達みたいに、一緒に勉強して、大学生活を暮らしている。

このごろは論文を書くために宮沢賢治を研究している。裕福な商人の長男として生まれた宮沢賢治は過酷な生活に苦しむ農民に接し、一生を農民にささげることを決意した。東奔西走の日を送っても、彼はきっと楽しかったのだろう。

「東に病気の子供があれば/行って看病してやり

/西に疲れた母あれば/行ってその稲の束を負い」という詩は、宮沢賢治の心境を描いている。これも生活の信念だろう。

日本語を勉強してもう四年になった。この四年間で知り合った先生たちが教えてくださったのは知識だけではなく、人生に対する態度、人と付き合う方法など山ほどある。他人に親切にさせていただいたこと、注意深いこと、特に生活や仕事に対する真面目な態度は、私に深い影響を与えてくださった。これは私の人生の貴重な宝物になる。